

キェルケゴールの「ヤコブの手紙」解釈とその思想

中里 巧

はじめに

S.キェルケゴールによって生前に公刊された著作のうち、仮名著作群^{*1}は、不安や絶望など閉塞的情感を前面に押し出しているように思われるのであるが、建德的講話著作群^{*2}では、仮名著作群においては多分に典型的に描かれて

*1 『あれか—これか』 *Enten-Eller*, Victor Eremita 刊行 (1843.2.20)、『反復』 *Gjentagelsen*, Constantin Constantius 著 (1843.10.16)、『おそれとおののき』 *Frygt og Bæven*, Johannes de Silentio 著 (1843.10.16)、『哲学的断片』 *Philosophiske Smuler*, Johannes Climacus 著 (1844.6.13)、『不安の概念』 *Begrebet Angst*, Vigilius Haufniensis 著 (1744.6.17)、『序文』 *Forord*, Nicolaus Notabene (1844.6.17)、『人生行路の諸段階』 *Stadier paa Livets Vej*, Hiralius 刊行 (1845.4.30)、『完結的非学問的後書き』 *Afsluttende uvidenskabelig Efterskrift til de filosofiske Smuler*, Johannes Climacus 著、S. Kierkegaard 刊行 (1846.2.28)、『危機』 *Krisen*, Inter et Inter 著 (1848.7.24-27)、『二つの倫理的—宗教的小論』 *Tvende ethisk-religieuse Smaa-Afhandlinger*, H. H. 著 (1849.5.19)、『死にいたる病』 *Syddommen til Døden*, Anti-Climacus 著 (1849.7.30)、『キリスト教の修練』 *Indøvelse i Christendom*, Anti-Climacus 著 (1849.7.30)。以下のテキスト参照：*Søren Kierkegaards Samlede Værker*, anden udgave, Gyldendalske Boghandel, København, 15 bind：以下 *Samlede Værker anden udgave* と略す。

*2 『二つの建德的講話』 *To opbyggelige Taler*, S. Kierkegaard 著 (1843.5.16)、『三つの建德的講話』 *Tre opbyggelige Taler*, S. Kierkegaard 著 (1843.10.16)、『四つの建德的講話』 *Fire opbyggelige Taler*, S. Kierkegaard 著 (1843.12.6)、『2つの建德的講話』 *To opbyggelige Taler*, S. Kierkegaard 著 (1844.3.5)、『三つの建德的講話』 *Tre opbyggelige Taler*, S. Kierkegaard 著 (1844.6.8)、『四つの建德的講話』 *Fire opbyggelige Taler*, S. Kierkegaard 著 (1844.8.31)、『想定された機会における三つの建德的講話』 *Tre Taler ved tænkte Leiligheder* (1845.4.29), S. Kierkegaard 著、『精神の相異なる諸段階を含んだ建德的講話』 *Opbyggelige Taler i forskjellige Aand*, S. Kierkegaard 著 (1847.3.13)、『愛の業』 *Kjerlighedens Gjerninger*, S. Kierkegaard 著 (1847.9.29)、『キリスト教講話』 *Christelige Taler*, S. Kierkegaard 著 (1848.4.26)、『野の百合と空の鳥—三つの敬虔講話な講話』 *Lilien paa; Marken of Fuglen under Himlen -tre gudelige Taler-*, S. Kierkegaard 著 (1849.5.14)、『「大祭司」「取税人」「罪ある女」„Ypperstepræsten“ „Tolderen“ „Synderinden“, S. Kierkegaard 著 (1849.11.14)、『一つの建德的講話』 *En opbyggelige Taler*, S. Kierkegaard 著 (1850.12.20)、『金曜日の聖餐式における二つの講話』 *To Taler ved Altergang om Fredagen*, S. Kierkegaard 著 (1851.8.7)、『神の不変

いた閉塞的情感のバリエーションが広がって奥行きが深まると同時に、閉塞的情感に対峙する歓喜や平安といった開放的な情感が繰り返し現れる。建德的講話群においては、閉塞的情感と開放的情感とのこうした対峙は、キェルケゴール独特のリズミカルで音楽を奏でているような、ときに過剰と思われるほどのレトリックによって、繰り返されるのである。建德的講話群においては、仮名著作群に伴う実存性を鋭く深くえぐっていくような痛快さや凄みや高度に弁証法的思索が突出していない代わりに、音楽的なレトリックの力を得て、語り手であるキェルケゴールと聞き手である読者がともに、自らの情感を開放して、神と自分の距離を省みていくというように働く。公刊された著作においてキェルケゴールは概して、社会的現象や個々の条件などにはあまり言及せず、むしろ理念や概念を追求する仕方で叙述が進んでいくため、プラトンの的であるとも云えるのだが、そうしたプラトンの特徴が、建德的講話群においては仮名著作群以上に強く、霊性や神性を限りなく追求し、霊性や神性の優位性を主張し続けていく*3。建德的講話群の読者に求められているのは、祈りが重要であり聖

性一つの講話-』 *Guds uforanderlighed -en Tale-*, S. Kierkegaard 著 (1855.9.3)。以下のテキスト参照： *Samlede Værker anden udgave* Bind 15。

*3 G. マランチュックは、*Papirer*X2A609 や X2A610 (s.436-437 in bind X2 in *Søren Kierkegaards Pædagogiske Skrifter* bind 1-25, ved Niels Thulstrup, udgivet af Det danske Sprog- og Litteraturselskab og Søren Kierkegaard Selskabet, København, Gyldendal, anden forøgede udgave, 1968-78)) を列挙して、キェルケゴールは、プラトンのうちに、キリスト教的理解との類似性を見出して、公正な人(義人)は此の世では苦しまなければならないと述べている、と指摘している (p. 869 in Vol.3 in *Søren Kierkegaard's Journals and Papers* Vol.1-7, ed. and transl. By H. V. & E. H. Hong, assisted by Gregor Malantschuk, Bloomington, Indiana University Press, 1967-78)。 *Papirer*X2A609 のなかでキェルケゴールは、「逆さ」 *Omvendtheden* という標題を付けて、次のように語っている「此の世ではあらゆるものが逆さであって her i Verden er Alt omvendt, 私が最善を尽くして、有徳 *Dyd* であろうと努めれば努めるほど、現象はますます悪くなっていくというキリスト教的理解 *det Christelige* は、すでに、プラトンの『国家篇』 *Platons Stat* にある倫理的なものに関する優れた記述のうちに見出すことができる」(s.436 in *Papirer*X2A609)。また、*Papirer*X2A610 では次のように語っている。「公正な人(義人) *den Retfærdige* は、鞭打たれ拷問台に縛り付けられ鎖に繋がれる。その人の眼は光を失い、想像するかぎりのあらゆる拷問の果てに、十字架に釘打たれる。そして人は、此の世で正義と認められるように努力しなければならぬが、正義 *retfærdig* であるためにはどれほど狂気 *gal* であっても足りないことに、最後の最後によく、気づくのである」(s.437 in *Papirer*X2A610)。

アウシュヴィッツ、ブーヘンヴァルト、ベルゲン＝ベルゼン強制収容所などで囚

書の聖句が主題であることを認めることだけであり、哲学や神学の既存の知識がことさら求められることはなく、むしろ日常の些事の次元で叙述は進んでいく。建德的講話群は、教会説教の形式にきわめて類似しているのであるが、説教が教義に準拠するものであり、牧師をとおして語り出されるのは、権威ある神性を帯びた言葉であるのに対して、建德的講話は、教義に縛られることはな

人として苛酷な体験をした作家ジャン＝アメリー Jean Améry (本名 Hans Maier 1912-1978) は、自分は信仰や信念を持ったことがなかったと次のように云っている。「……逮捕され強制収容所に送られたとき、この私はいかなる信仰とも政治信念とも無関係な、いわば不可知論者であったし、一九四五年四月十五日、イギリス軍によるベルゲン＝ベルゼン強制収容所の解放にともない、この世の地獄から出てきたときも同じ不可知論者にとどまっていた。私はいかなるときも一つの信仰に帰依しようとは思わなかった」(ジャン＝アメリー著池内紀訳新版『罪と罰の彼岸—打ち負かされた者の克服の試み—』、みすず書房、2016 年のうち、37～38 頁。原題は下記のたとおり: *Jenseits von Schuld und Sühne – Bewältigungsversuche eines Überwältigten–*, von Jean Améry, J. G. Cotta'sche Buchhandlung, Stuttgart, 1966 (1977) .そして、アメリーは、自分のような信仰的理念をもたない知識人の教養や精神性は、まったく無力だったと云う。「餓死と衰弱死に直面し、非精神化にとどまらず、文字どおり非人間化した者たちのもとにあって、精神の有効性など無意味きわまることであった」(ジャン＝アメリー著池内紀訳新版『罪と罰の彼岸—打ち負かされた者の克服の試み—』のうち、31 頁)。しかし信仰や信念を持っていた者は違っていたと云う。「宗教上または政治上の信仰の持主たちは、収容所における想像を絶した何ごとにも、さほど驚かなかった。敬虔なキリスト者やユダヤ人からみれば、神に背いた人間はおのずからアウシュヴィッツの残虐をやりかねないのである。……何であれ、イデオロギーなり神なりを信じている人々にとっては、自分たちがすでに予期していたこと、あるいは起こっても不思議はないと考えていたことが起こったに過ぎなかった。これまで世間であって多かれ少なかれ受けてきた現実が度を強めただけであった。その現実には彼らは奇妙なまでに対処していた。つまり彼らの王国が「ここ」ではなく、「今日」ともかかわっていなかったからである。それは「明日」であり、「どこか」にあった」(ジャン＝アメリー著池内紀訳新版『罪と罰の彼岸—打ち負かされた者の克服の試み—』のうち、39-40 頁)。アメリーは、キェルケゴール思想についても述べて、信仰をもたない自分にとっては、キェルケゴール思想は無意味だったと語っている。「……哲学者キェルケゴールの言葉を思い出す人もいるだろう。いわく、人間にとって存在するものは、ただ存在の光を通してのみであり、人間は存在するものによって実存を忘れる、というのである。お説ごもつともではあるが、どこにもまして強制収容所では、存在するものとか存在の光とかで何ごとものはじまらない次第はいうまでもないことだった。私たちは餓えていた。病んでいた。実存それ自体にいかなる意味もなかった。存在が見方というものを失いつくして空しい概念となっていた。言葉によってむごたらしい現実から逃れるなどのことが無意味であると同時に、それは許しがたい贅沢であった。のみならず唾棄すべき悪辣な戯れにほかならなかつた」(ジャン＝アメリー著池内紀訳新版『罪と罰の彼岸—打ち負かされた者の克服の試み—』のうち、49-50 頁)。

く、デンマーク敬虔主義の伝統のなかで、牧師とは異なって権威をもたない平信徒が自分の信仰体験を土台にしながら、私的集会のなかで、神性を帯びてはいない生の人間の言葉を語ることを以てして、皆がともに、聖書の聖句に寄り添い、祈り合うためのものであった。説教の場合は、神性を帯びているがゆえに、人々は説教の言葉を信頼して、これに寄りかかることができるのに反して、建德的講話の場合は、神性を帯びてはいないので、その言葉に頼りきることはできず、そこに参集する人々ひとりひとりが、自分なりの仕方でも省みながら、講話で語られる言葉を機縁にして、ひとりひとりが個々に聖書の聖句に直に向き合って、みずから神性の何たるかを見出していくことになるのである。

1. 繰り返し引用される「ヤコブの手紙」

キェルケゴールは、とりわけ一連の建德的講話群のなかで、繰り返し、新約聖書の公同書簡のひとつである「ヤコブの手紙」の聖句を取り上げている。「ヤコブの手紙」を、M.ルターが藁の書と呼んで、宗教改革の根幹であった信仰義認と相容れないものとして排斥したことは、よく知られている*4。キェルケゴールは、ルター派を自認していたが*5、「ヤコブの手紙」を取り上げることに、ルター派教義との軋轢や葛藤についてことさらに語っている形跡はない。「ヤコブの手紙」のなかでヤコブは、業（行い）*ἔργον*と信仰*πίστις*につ

*4 ルターの信仰義認論は、次の聖句に基づく。「では、人の誇りはどこにあるのですか。誇りは取り除かれました。どういう原理によってですか。行いの原理によってですか。そうではありません。信仰の原理によるのです。人が義とされるのは、律法に定められた行いとは関わりなく、信仰によるものであると、私たちは考えるからです」（フランシスコ会訳聖書「ローマの人々への手紙」3：27～28）（『原文校訂による口語訳』フランシスコ会聖書研究所編・刊行、サンパウロ、2013年）。他方、ヤコブの手紙の多くの聖句は、信仰義認について懐疑的な印象を与える。例えば、「これで明らかのように、人は行いによって義とされるのであって、信仰だけによるものではありません」（フランシスコ会訳聖書「ヤコブの手紙」2：24）など。

*5 マランチュックは、キェルケゴールのルター思想との関わりについて、次のように述べている。「キェルケゴールは、自分自身の霊想的（建德的 *opbyggelige*）諸著作を、作品群全体のなかで中心的なものとして位置づけていたのと同様に、ルターによる霊想書を、ルターの諸著作のなかで最も重要なものと見なしていた。……ルターによる説教についての所感のあらましで、キェルケゴールは完全にルターを認めていた」（p. 803 in Vol.3 in *Søren Kierkegaard's Journals and Papers* Vol.1-7）。

いて触れて、業の重要性を語っている聖句が多数ある*6。これらのうち、とりわけ、「人は行い *ἔργων* によって義とされる *δικαιοῦται* のであって、信仰だけ *πίστεως μόνον* によるものではありません」(フランシスコ会訳聖書「ヤコブの手紙」2:24) という聖句が、信仰義認論の根拠となった「人が義とされるのは、律法に定められた行いとは関わりなく、信仰によるものであると、私たちは考えるからです」(フランシスコ会訳聖書「ローマの人々への手紙」3:28) という聖句と、ルターにとっては相容れないのであった。これが、ルターによって「ヤコブの手紙」が藁の書と名指しされて、排斥された元兇である。

*6 「これに反して、自由をもたらす完全な律法 *νόμον τέλειον* を一心に見つめて、それを守る人は、聴いて忘れる人ではなく、実際に行う人 *ποιητής ἔργου* です」(フランシスコ会訳聖書「ヤコブの手紙」1:25)、「あなた方は、自由をもたらす律法によって裁かれる者として、ふさわしく語り、かつ行いなさい *ποιεῖτε*」(フランシスコ会訳聖書「ヤコブの手紙」2:12)、「私の兄弟たちよ、たとえ、誰かが自分は信仰 *πίστιν* をもっているとんでも、行いが伴わないなら *ἐργαδὲ μὴ ἔχη*、何の役に立つでしょうか。そのような信仰は、その人を救うことができるでしょうか」(フランシスコ会訳聖書「ヤコブの手紙」2:14)、「信仰 *πίστις* もまたこれと同じで、行いを伴わないなら *μὴ ἔχη ἔργα*、それ自身、死んだもの *νεκρά* です」(フランシスコ会訳聖書「ヤコブの手紙」2:17)、「しかし、「ある人には信仰 *πίστιν* があり、またほかの人には行い *ἔργα* がある」と言う者があろう。それなら、行い *ἔργων* のないあなたの信仰 *πίστιν* なるものを見せてほしい。そうしたら、わたしの行い *ἔργων* によって信仰 *πίστιν* を見せてあげよう」(『口語訳聖書』(日本聖書協会発行、(1954年)2002年)「ヤコブの手紙」2:18)、「愚かな人よ、行いを伴わない信仰のむなしさ *ἡ πίστις χωρὶς τῶν ἔργων ἀργή* を知りたいのか」(フランシスコ会訳聖書「ヤコブの手紙」2:20)、「われわれの父アブラハムは、その子イサクを祭壇の上にささげるとき、その行い *ἔργων* によって義とされた *ἐδικαιώθη* のではないだろうか」(フランシスコ会訳聖書「ヤコブの手紙」2:21)、「あなたは、信仰が彼の行いとともにも働いたこと *ἡ πίστις συνήργει τοῖς ἔργοις αὐτοῦ*、また、行いによって信仰が完全なものとされたこと *ἐτελειώθη* が分かるだろう」(フランシスコ会訳聖書「ヤコブの手紙」2:22)、「これで明らかのように、人は行い *ἔργων* によって義とされる *δικαιοῦται* のであって、信仰だけ *πίστεως μόνον* によるものではありません」(フランシスコ会訳聖書「ヤコブの手紙」2:24)、「これと同じく、娼婦ラハブも、使いの者たちを家に入れ、ほかの道から送り出したとき、その行いによって義とされた *ἐξ ἔργων ἐδικαιώθη* のではありませんか」(フランシスコ会訳聖書「ヤコブの手紙」2:25)、「霊魂のないからだ *τὸ σῶμα χωρὶς πνεύματος* が死んだもの *νεκρόν* であると同様に、行いのない信仰 *ἡ πίστις χωρὶς ἔργων* も死んだもの *νεκρά* なのである」(口語訳聖書「ヤコブの手紙」2:26)、「あなた方のうちに、知恵 *σοφός* があり物分かりのよい *ἐπιστήμων* 人がいますか。その人は、知恵になかった柔和な行い *τὰ ἔργα αὐτοῦ ἐν πραΰτητι σοφίας* を、立派な生活によって示しなさい」(フランシスコ会訳聖書「ヤコブの手紙」3:13)。

「ヤコブの手紙」において「業」 *ἔργον* と「信仰」 *πίστις* の関係は、およそ三つに特徴づけられる。第一は、「ヤコブの手紙」2：14／2：17／2：18であり、業をもたない信仰が否定されている。第二は、「ヤコブの手紙」2：22であり、業と信仰が協働関係にあることが主張されている。第三は、「ヤコブの手紙」2：24であり、業に対する信仰の一方的一面的優位性が否定されている。これら三つの特徴を換言すれば、業と信仰の関係はつねに協働的であり、どちらか一方が欠如しても他方が成立しない関係であり、さらに、信仰にとって存在根拠でもあれば認識根拠でもあるというように、業が強調されているのである。こうした業と信仰の関係性は、キェルケゴール思想における実存と思索の関係性と類似している。

「信仰が彼の行いととも働いた」（フランシスコ会訳聖書「ヤコブの手紙」2：22、）や「人は行いによって義とされるのであって、信仰だけによるものではありません」（フランシスコ会訳聖書「ヤコブの手紙」2：24）という聖句は、「行い」を「実存」に、「信仰」を「思索」に置き換えると、「ヤコブの手紙」とキェルケゴール思想の「業」と「実存」をめぐる類似性がさらにはっきりする。

このように、キェルケゴールにとって「ヤコブの手紙」は業を強調する点で、キェルケゴールの「実存」 *Exsistens*^{*7} 概念と噛み合うがゆえに、「ヤコブ」の手紙を好んで取り上げたのではないか、との予想が成り立つのである。しかしながら、建德的講話群のなかでキェルケゴールが取り上げる「ヤコブの手紙」の聖句は^{*8}、「善い贈り物 *δόσις* と、完全な賜物 *δώρημα* とは、すべて上から *ἄνωθεν*、光 *φῶτων* を造られた御父から来るのです。御父には移り変わりもな

^{*7} キェルケゴール思想における「実存」 *Exsistens* 概念の勝義は、「実存しつつ思索する」 *eksisterende at tænke* ないしは「実存する思索者」 *den eksisterende Tænker* という言葉に凝集されている。「個々の主体は実存する主体であり、したがって主体は、そのあらゆる認識（思索）のうちに本質的に表れる」（s.69 in Bind 7 in *Samlede Værker anden udgave*）とキェルケゴールは云う。こうした「実存」とは、葛藤や矛盾に耐えながら真実の生を究明していく「生き様・人生・生涯」を示唆しているものであり、「ヤコブの手紙」における「業」（行い） *ἔργον* と、意味上重複すると解釈できる。参照：s.572 in *Samlede Værker anden udgave* Bind 15.

^{*8} s.60-61 in *Bibelen i Søren Kierkegaards »Samlede Værker«*, udarbejdet af Peter Parkov, C. A. reitzels Forlag A/S, København, 1983.

く、陰 *ἀποσκίασμα* に隠れることもありません」(フランシスコ会訳聖書「ヤコブの手紙」1:17) などの、霊性を強調した聖句であって*9、「信仰が彼の行いとともに働いたこと」(フランシスコ会訳聖書「ヤコブの手紙」2:22) や「人は行いによって義とされるのであって、信仰だけによるものではありません」(フランシスコ会訳聖書「ヤコブの手紙」2:24) といった、業の重要性についての聖句ではないのである。むしろ、業の重要性についての聖句は、意識的に避けていると云ってまちがいないほど、取り上げられていないのである。

2. 「ヤコブの手紙」の位置

聖書のなかの「ヤコブの手紙」は、公同書簡*10の最初に位置づけられている。新約聖書の目次構成は、イエス=キリストのいわば伝記ないしは言行録である「福音書」に始まり、イエス=キリストの昇天直後に始まるイエスの使徒たちや門徒たち*11を中心にした初代教会史である「使徒言行録」が続き、さらに使徒パウロによる書簡があり、その次に、公同書簡が配置されている。しかしこうした目次構成は、実のところ唯一絶対で有るわけではなくて、「使徒言行録」の次に「ヤコブの手紙」を配置させているキリスト教正教の邦訳聖書もある*12。じつは、公同書簡を「使徒言行録」の次に置いて、さらにその次に、使徒パウロ書簡を配置した方が、イエス=キリストとの親近性や親和性の象徴である聖家族のつながりや、イエス=キリスト昇天以降の時系列に忠実なので

*9 キェルケゴールが生前に公刊した著作のなかで引用している「ヤコブの手紙」の聖句は以下のとおり：1:5、1:6、1:8、1:11、1:13-15、1:17-22、1:18-19、1:22-27、2:1、2:8、2:10、2:19、3:5、3:19、3:15、4:4-5、4:8、4:13-15、5:7、5:9、5:16、5:20。

*10 公同書簡は、以下の順番で構成されている：「ヤコブの手紙」、「ペテロの第一の手紙」、「ペテロの第二の手紙」、「ヨハネの第一の手紙」、「ヨハネの第二の手紙」、「ヨハネの第三の手紙」、「ユダの手紙」。公同書簡は、特定の教会信徒に当てた使徒パウロの書簡とは異なって、キリスト教徒全体に当てた手紙である。

*11 「使徒」とはいわゆる十二弟子やパウロを指し、「門徒」とはイエス=キリストが二人一組で宣教を命じた 70 人の弟子を指す (ルカ 10:1)。

*12 日本正教会翻訳『我主イイスハリストスの新約』、東京正教会本会印行、1901年(2014、日本ハリストス正教会教団発行)。日本正教会訳新約聖書の目次構成の順序は、「聖福音」(福音書)、「聖使徒行実」(使徒言行録)、「公同書簡」、「使徒パウロ書簡」、「神学者イヨアンノ黙示録」(聖ヨハネ黙示録)となっている。

ある。

「ヤコブの手紙」は、公同書簡の筆頭に置かれているが、これによって聖家族のつながりや初代教会の時系列が、さらに明確になる。「ヤコブの手紙」の筆者ヤコブは、マリアの夫であり、イエスの父であったヨセフの連れ子でありその長男であったか、マリアの姉妹の子でありイエスにとって従兄弟であったか、いずれかであろう*13。ちなみに、当時のヘブル語やアラム語の慣習や用語法では、兄弟と従兄弟はほぼ同義語であった。

初代教会におけるヤコブの役割や意義は、格別に大きかったことが想像される。「使徒言行録」(15:13)などをとおしてイエスの兄弟とも呼ばれていたこのヤコブは、ペテロとパウロを繋ぎ止める重要な役割を果たしていた。ペテロとパウロはそれぞれ、その背景や考えが大きく異なり仲が悪く、ペテロとパウロが分裂してしまえば、初代教会そのものが分裂することになるのであった。ペテロは初代教会のなかで、ユダヤ教やユダヤ人社会の伝統を継承しているとする十二弟子のひとりであり使徒でもあった。他方パウロは、十二弟子でも門徒でもなかったが使徒であり、ユダヤ人やユダヤ文化の圏外との交渉が多く、そうしたユダヤ圏外の人々にとって有利な理解をもっていた。初代教会の大多数はユダヤ人であり、その代表がペテロであった。そしてこのペテロと真っ向から対立する格好となっていたのが、パウロなのであった。

いわばペテロは、業を象徴する立場ないしは内在の立場にあり、パウロは、恩寵を象徴する立場ないしは超越の立場にあった。初代教会の分裂を孕むこれら両者を繋ぐのが、イエスの兄弟と呼ばれた「ヤコブの手紙」の筆者であるヤコブであり、彼は明らかに、イエスの家族であり兄弟(ヨセフの連れ子としての長兄もしくは母方の従兄弟)であり*14、イエス＝キリストの昇天後、その霊

*13 「一般に認められているのは主の兄弟ヤコブ(マルコ6:3、マタイ12:46)である。彼はエルサレムの司教であり、六二年に殉教し、「義人」と言い伝えられている。……彼はゼベダイの子ヤコブが殉教してからまだ日の浅い四二年前、エルサレムの一権威者として登場し(使徒言行録12:17)、ペテロとパウロも出席しているエルサレムの会議において議長を務めている(使徒言行録15:13-21)―(フランシスコ会訳聖書のうち、635～636頁)。

*14 ヤコブがイエスの家族であり兄弟であったという解釈は、正教会やカトリック教会の生神女ないしは聖母マリアの処女性理解に基づいている。キェルケゴールの聖

性を継承する当時生存していた聖家族のなかでイエスの母マリアをのぞいて、イエスの次に位置するという意味で、初代教会を結束する最重要人物であった*15。

イエス＝キリストの兄弟と呼ばれるヤコブの霊性のもつ重要性は、このように聖家族という観点を導入することによって、明白になる。聖書編纂事業がローマ人やギリシア人などユダヤ人以外のキリスト教徒にとって有利な観点からなされたと仮定すると、「使徒言行録」の次にパウロ書簡（しかも、パウロ最晩年の殉教直前の悲愴な「ローマの人々への手紙」が筆頭）を配置して、その次に公同書簡を、その本来の意義を貶めるように、配置した理由が容易に想像されよう。

公同書簡は、ほぼ、聖家族のなかでイエス＝キリストに近い順番で、ヤコブ・ペテロ・ヨハネ・ユダという並びでそれぞれの手紙が配置されており、「ヤコブの手紙」は、公同書簡の筆頭に置かれている。要するに、「ヤコブの手紙」の筆者であるヤコブは、聖母マリアに次いでイエス＝キリストの霊性を継承する人物であり、初代教会のまさに中心人物であって、そのヤコブの思想が「ヤコブの手紙」に籠められているわけである。

以下、主に建徳的講話群をとおしてキェルケゴールが「ヤコブの手紙」についてどのように理解していたのか、とりわけキェルケゴール思想における信仰と業の関係性について、考究する。

3. 建徳的講話群のなかの「ヤコブの手紙」

キェルケゴールは、すでに述べたように、好んで「ヤコブの手紙」を取り上

書理解は、正教会やカトリック教会に保存されている初期キリスト教伝承と適合することが多い (p. 189-191 in *Orthodox Dogmatic Theology - a Concise Exposition*, by Michael Pomazansky, translated and edited by Seraphim Rose & the St. Herman of Alaska Brotherhood, third edition, St. Herman of Alaska Brotherhood, California, 2009)。

* 15 エルサレム教会の初代司教と伝承されている (p. 1673 in *The Orthodox Study Bible*, prepared under the auspices of the Academic Community of St. Athanasius Academy of Orthodox Theology, Elk Grove, Fr. Jack Norman Sparks, Thomas Neslson, Nashville, 1982 (2008))。

げられるように思われる。ただし建德的講話群のなかで、「ヤコブの手紙」の聖句を講話の標題として掲げているのは、必ずしも多くはなく、『二つの建德的講話』*To opbyggelige Taler* (1843年)と『神の不変性—一つの建德的講話—』*Guds uforanderlighed -en Tale-* (1855年)の二つに過ぎない。「ヤコブの手紙」の聖句を講話の標題として掲げているわけではないけれども、講話の文脈やキェルケゴール思想との関連で実質的に「ヤコブの手紙」の聖句が重要な役割を果たしているものとしては、『精神の相異なる諸段階を含んだ建德的講話』*Opbyggelige Taler i forskjellige Aand* (1846年)がある。

こうしてみると建德的講話群のなかで、「ヤコブの手紙」の聖句は、およそ建德的講話群全体のなかで、その最初に位置する『二つの建德的講話』(1843年)、そのほぼ真ん中であり転換としての役割を担っているであろう『精神の相異なる諸段階を含んだ建德的講話』(1846年)、その最後に位置する『神の不変性—一つの建德的講話—』(1855年)で取り上げられている。すなわち、建德的講話群の最初、真ん中ないしは転換点、最後というように、建德的講話の著作活動のなかで象徴的かつ意図的に意味をもたせて、キェルケゴールが「ヤコブの手紙」の聖句を取り上げていたことが想像されるのである。

(1) 『二つの建德的講話』(1843年)

この講話のなかで「ヤコブの手紙」の聖句が取り上げられるのは、二番目の建德的講話であり、その標題は「あらゆる善き賜物、あらゆる完全な賜物は上からやってくる」*Al god og al fuldkommen Gave er ovenfra*であり、取り上げられている「ヤコブの手紙」の箇所は1: 17-22である*¹⁶。

文脈上の要点としては、自然のなかの神性が上(天上Himlen)*¹⁷からやってくることに對して、下(地上)の出来事や悩みは未解決なままであることの困難さ、未解決であることゆえの絶望*Fortvivlelsen**¹⁸・信仰の失墜など、「光」

*¹⁶ s.43-44 in *Samlede Værker anden udgave*.

*¹⁷ s.47 in *Samlede Værker anden udgave*.

*¹⁸ s.51 in *Samlede Værker anden udgave*.

Lysen^{*19}の普遍性と働きの偉大さ・神の愛の慈悲深さ Varmhjertigheden^{*20}・神の愛に対する謙虚さの必要性、パウロの言葉（「神がお造りになったものはすべて善いものであり、感謝 Taknemelighed^{*21}してこれ受ける時は、何一つ捨てるものはありません」（フランシスコ会訳聖書「テモテへの第一の手紙」4：4）、万物は神を愛する人々には役立つ、勇気 Mod^{*22}の必要、思想と言語 Tanken og Sprog^{*23}は行為や業（愛の表現としての感謝）よりも低次の表現である、神の愛 Kærligheden^{*24}に呼応する幼子のような人間に成ること、利己的な解釈という罰 Straffen^{*25}、聖句を受け入れることの喜び salig^{*26}（キェルケゴール講話遺稿集第1巻78～79頁）などが、挙げられる。

(2) 『精神の相異なる諸段階を含んだ建徳的講話』（1846年）

「ヤコブの手紙」との関連での文脈上の要点としては、「折にふれての講話」Leiligheds = Taleのなかの標題「心の清さは一つ（善）を願う」Hjertets Reenhed er at ville Eet に付属するものとして、「ヤコブの手紙」4：8が取り上げられて、神に近づくこと holde sig nær til Gud と清め Reenhed の必要なこと^{*27}、報いのために善を願うこと at ville de Gode for Lønnens Skyld に対する戒め^{*28}、本当に善を願うなら、善のためにあらゆる事行い耐え忍ぼうとすること ville gjøre Alt for det Gode, eller ville ide Alt for de Gode^{*29}、苦難 Lidelse の意義と必然性 Nødvindighed は無慈悲 grusom ではないこと^{*30}などが、挙げられている。

* 19 s.53 in *Samlede Værker anden udgave*.

* 20 s.53 in *Samlede Værker anden udgave*.

* 21 s.56 in *Samlede Værker anden udgave*.

* 22 s.57 in Bind 3 in *Samlede Værker anden udgave*.

* 23 s.59 in Bind 3 in *Samlede Værker anden udgave*.

* 24 s.60 in Bind 3 in *Samlede Værker anden udgave*.

* 25 s.61 in Bind 3 in *Samlede Værker anden udgave*.

* 26 s.62 in Bind 3 in *Samlede Værker anden udgave*.

* 27 s.153 in Bind 8 in *Samlede Værker anden udgave*.

* 28 s.169 in Bind 8 in *Samlede Værker anden udgave*.

* 29 s.207 in Bind 8 in *Samlede Værker anden udgave*.

* 30 s.232 in Bind 8 in *Samlede Værker anden udgave*.

(3) 『神の不変性——一つの建德的講話——』（1855年）

「ヤコブの手紙」との関連での文脈上の要点としては、「ヤコブの手紙」1：17-21が取り上げられて*³¹、神の不変性と人間の不完全さ *den menneskelige Ustadighed* の双方を取り上げることの必要性*³²、神の象徴としての光 *Lysen* *³³、人の怒り *Mands Brede* は神の義 *ret for Gud* を果たさない*³⁴、神の不変性の本質としての慰め *Trøst*・平安 *Fred*・喜悅 *Glæde*・浄福 *Salighed* *³⁵、可変性と不変性の質差の恐ろしさ *forærdende* と畏れ戦き *Frygt og Bæven* *³⁶、神の不変性に対する畏怖、神の不変性に対する人間の不安 *Angest*・動揺 *Uro*・絶望 *at fortvivle* *³⁷、我意我執 *Egenvillie* を捨てることと神の不変性の安らぎ *Hvile* *³⁸、神の愛の象徴としての泉 *Kilden* *³⁹などが、挙げられる。

4. 建德的講話群のなかの「ヤコブの手紙」とキェルケゴール思想

「ヤコブの手紙」においては業ないしは行為、キェルケゴール思想においては実存ないしは実存性は、その表層としては有限性や時間性ないしは社会性に被われているのであるが、業や行為ないしは実存や実存性というのは、霊性と協働的であり、それゆえ、霊性ないしは永遠または無限という契機なくしては成立せず、かえって、霊性や永遠のほうが優位することによって、行為や実存性は成立する。要なのは、「そして人は、此の世で正義と認められるように努力しなければならないが、正義 *redfærdig* であるためにはどれほど狂気 *gal* であっても足りないことに、最後の最後にようやく、気づくのである」(s.437 in *Papirer*X2A610) というキェルケゴールの言葉である*⁴⁰。善や真実を誠実に希

*³¹ s.293 in Bind 14 in *Samlede Værker anden udgave*.

*³² s.294 in Bind 14 in *Samlede Værker anden udgave*.

*³³ s.294 in Bind 14 in *Samlede Værker anden udgave*.

*³⁴ s.295 in Bind 14 in *Samlede Værker anden udgave*.

*³⁵ s.296 in Bind 14 in *Samlede Værker anden udgave*.

*³⁶ s.297 in Bind 14 in *Samlede Værker anden udgave*.

*³⁷ s.303 in Bind 14 in *Samlede Værker anden udgave*.

*³⁸ s.304 in Bind 14 in *Samlede Værker anden udgave*.

*³⁹ s.305 in Bind 14 in *Samlede Værker anden udgave*.

*⁴⁰ 註3を参照。

求する実存ないしは実存性は、有限性や時間性などの社会性に被われているかぎり、心理的－社会的位相からは理解不能な「狂気」gal（不条理ないしは浮遊性）を保持し続けるほかはない*41。そして、実存ないし実存性が不条理や浮遊性を保持し続けるためには、つねに、霊性や永遠が時間性に対して優位することが必要なのである。

* 41 大勝秀高著『生と死の心理学』阿吽社、2011 年のうち、261 頁以下参照。